

Title	退休記念座談会：関根謙教授、その人と学問
Sub Title	Prof. Ken Sekine reminisces about his life dedicated to the study of modern Chinese literature
Author	関根, 謙(Sekine, Ken) 長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo) 櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko) 吉川, 龍生(Yoshikawa, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.10 (2017.) ,p.217- 255
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退休記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20170331-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

退休記念座談会

関根謙教授、その人と学問



関根謙教授

出席者

関 根 謙（文学部教授）

長 堀 祐 造（経済学部教授。企画・文責）

櫻庭 ゆ み 子（商学部教授）

吉 川 龍 生（経済学部准教授）

はじめに

長堀 関根先生が今年度でご退休ということで、三田の『藝文研究』の記念号で経歴や業績は載りますが、日吉では関根先生の生の声を残しておきたいということで、本誌『中国研究』企画の座談会をすることになりました。

関根先生は、文学部長も五年半ほど務められ、行政の分野でも業績を残されているし、当然のことながら研究の専門分野でも成果をたくさん残されたということで、関根先生の功績を讃えるという意味も当然あるわけですが、それに加え、実はこの『中国研究』という紀要は関根先生が創刊に一番尽力されたということもあり、その出自からしても必然性のある企画だろうと考えています。

司会 は長堀が務め、商学部 櫻庭ゆみ子さん、経済学部の吉川龍生さんに同席を願いました。ともに中国の近現代文学が専門ですが、櫻庭さんは塾内外で関根先生と研究会等で活動されているし、吉川さんは、関根先生がかつての指導教授でもあり、今は同僚という立場でさまざまなプロジェクトで一緒に活動なさっています。今日はそれぞれの

方面から、関根先生の人と学問、それから教育、学内行政など、さまざまな分野について質問し、そして関根先生に大いに語っていただきたいという趣旨です。

関根先生の略歴

長堀 こうした座談会での慣例に従って、まず簡単に私から関根先生の略歴をご紹介します。

関根先生は、福島県郡山市の生まれで、そこからいろいろあるのですけれども、これは後で関根先生ご自身からお話しいただくことにして、高校は東京都立の千歳丘高校を一九七一年に卒業されています。同年、慶應義塾大学文学部に入学し、中国文学専攻に進まれ、一九七五年に卒業。一九七六年に修士課程入学、一九七八年に同課程を修了されています。

それから、職歴は、まず埼玉県立越谷南高校で全日制の国語科教諭として四年間、続いて川越高校定時制で六年間教諭をなさっています。その後、中国西安外国語学院の日本語専家（特別な技術を持った専門家を指す）となられて二年間教え、北陸大学外国語学部助教教授を経て、一九九五

年に慶應義塾大学文学部助教授に着任されました。一九九九年から文学部教授、二〇一〇年以降つい最近までは文学部長をなさったというご経歴です。

この略歴で触れなかったことで、非常に面白いところがあります。まず福島時代の関根先生のお生まれ、実家ですが、どういうところにお生まれになって、どういう小学校、中学校生活を送ってこられたのか。特に中学校生活では、一時期中国で暮しになっている。当時の日本では非常に珍しい経験をなさっているわけで、その辺を含めて、まずは誕生から高校入学ぐらいまでを振り返っていただけますか。

家族の歴史と小学校時代

関根 まず、経歴を補足する前に、今日このような機会を作っていただきまして『日吉紀要 中国研究』に心から感謝申し上げますと思います。また今日の具体的な計画、そしてご参集いただいた長堀さん、櫻庭さん、吉川さん、本当に有難うございます。

僕は父方の祖父が国鉄の保線、線路を敷くほうの技師で、全国を回っていて、樺太に線路を引いたのうちの祖父の

仕事だったと聞いています。ですから、父は大阪で生まれたあとと日本中を回っていて、早稲田大学に進むのですが、その前、戦争の間は樺太にいたと聞いています。

茨城から福島にかけては関根という姓が結構多いのですけれども、曾祖父は若くして小学校校長を務め、地域の社会教育に貢献した教育者で、今でも「頌徳碑」が残っています。

母方は、福島県の二本松にある天台宗のお寺です。天台宗の中では大僧正の位をもらっているようなお寺で、地元の人たちに慕われるお寺だったようです。

父は、僕が生まれた当時は安積女子高あさかの教員で、郡山市内に住んでいました。実は父は早くから左翼の運動に参加していました。学生時代は右翼だったらしいですが、その後急激に左傾化して共産党に入党していたようです。

父なりの考え方があったのだらうと思うのですが、子供のころから英語をまず学ばせなければいけないという実に強い意志を持っていたようで、僕は最初は公立の普通の小学校に入ったのですが、二年生の時にザベリオ学園というキリスト教の教えを教育理念に据えたミッションスクールに入りました。それで実は郡山ザベリオ学園の第一期生と

いうことになります。

父は左の運動を随分やっていたわけですが、母は仏教系の非常に篤い信者の家ということで、僕は非常に混乱していたのですけれども、自分自身は、真面目な生徒で、いわゆるいい子だったのだろうと思います。修道女の先生たちからすごく可愛がられ、いろいろな教えも忠実に守り、修道院の奥のほうにあるお御堂という場所に生徒たちみんなで静かに並んで礼拝するミサがあるのですが、そういうのも欠かさずやっていました。小さなロザリオをもらい、祈るたびにそのロザリオを押さえて祈りを捧げるとかいうこともやっていました。その当時、毎晩お祈りをしなさいと言われて、僕はかなり忠実にそれをやっていたほうだと思います。父たちはそれをどう思っていたのか全く分かりませんが、僕個人としてはザベリオ学園での教えをかなり信じて育ってきた。一番大事な時にそういうふうにして育ってきた子供だったと思います。

中国での中学校時代

関根 僕が小学校を卒業して中学に入る年は一九六四年、

東京オリンピックの年なのですが、その時の父の計画というのが、家族で中国に渡ることでした。六〇年代前半というのは、中国は社会主義建設の途上にあつて、様々なプロジェクトも進んでいたのですが、後で考えてみると、中国史の中では結構面白い時期で、毛沢東の権力が一番弱体化する時期だったわけです。また、ソ連共産党と中国共産党の間でいわゆる修正主義の論争が起こつて、ソ連が中国の建設から全て手を引いて、建設途中の工場も含めて全部残したまま本国に帰還していく、そういう大変な決裂の時だったわけです。その当時は日本共産党と中国共産党はかなり緊密な連携をとっていたようで、中国共産党は社会主義建設のいろいろな問題を引き続き発展させていくためには、日本の力が必要だと判断したらしく、日本共産党に応援を依頼した。日本共産党は、それに応えて日本から中国に人を派遣することになります。

その中にうちの父がいたわけですが、どうやら指導的な役割を果たしていたのではないかと思います。その時、中国とは国交がなく、父はともかく家族全部引き連れてまず香港に渡り、香港で中国との連絡がとれるまでしばらく滞在しました。その時に、僕らは父から香港というの

は資本主義のとても危ないところだから絶対に表に出てはいけなくと脅かされていてまして、せっかくの香港なのですが、ほとんどホテルでひたすら中国との連絡がとれるのを待って過ごしていたと思います。

やがて連絡がとれて中国に入っていくわけですが、大歓迎を受けます。本当に国のお客様として、ものすごく厚い接待を受けて、最終的には大連に任地が決まります。今で言えば大連外国語大学ですが、その前身である大連日語専科学校の日本語教育の専門家として、大連で仕事をすることになるわけです。

僕と妹はそこについて行くのですが、当然インターナショナルスクールとか日本語学校とか、国交もないわけですから何もなく、当時大連の中で最もいい学校と言われていた大連第八中学にまず入れられることになります。八中で徹底的に中国語を教えられて、友達もそこできいるのです。ちなみに、その時第八中学の違うクラスにいたのが、経済学部で今年（二〇一六年三月）退職された于振領さんでした。于振領さんは、僕が通学しているのをずっと見ていて、妹が来ているのもよく知っていたと話していました。

僕と同級生で非常に親しくつき合っていた張守鵬という

クラスメイトがいたのですが、彼はその後大連外国語大学の副学長になります。また、僕らの家族について通訳やいろいろな世話をしてくれていた徐甲申さんは、その後、大連外国語大学漢学院の院長になっています。調べてみるとビッグネームがいっぱいいるのですが、そういう人々に囲まれて、非常に充実した中学校生活を送りました。

中学校時代の思い出で忘れられないのは、労働体験学習のようなものがあり、十日間という長い期間なのですが、農村に入って実際農民と一緒に暮らしながら、畑を開墾したりいろいろな作業をしたりしたことです。先生たちは関根を連れていくかどうかということで相当考えたらしいのですが、その当時僕はかなり中国語ができるようになっていて、貴重な体験だから連れていきましようということになったのです。十三歳というのは一番外国語が身につく時期のようです。あつという間に中国語ができるようになりました。周りは中国語の世界ですから、毎日中国語漬けで、半年ぐらいで喋れるようになったと思います。今よりずっと中国語は上手だったと思うのです。

僕は外国人には一切開放されていない旅順の農村に入りクラスメイトと一緒に畑の開墾をしました。二、三年前に

かつてのクラスメイトたちが僕をその場所に連れていかれて、ここでおまえは泊ったんだというところを見せてくれましたが、ほとんどあの当時と変わっていないように思いました。あの一角は僕が開墾したのだという、そういう何か不思議な思いに捉われて見た覚えがあります。

文化大革命時の混乱と引き上げ

関根 間もなく一九六六年から文化大革命が始まります。その大変な混乱の中で、中国が大好きだった父は苦渋の決断をして、これはいけないということで日本に帰る。僕のことを一生懸命面倒見てくれた先生たちはみなその時に批判され、誰ももう残らない。どんな学校は荒んだ状態というか、革命的な状態というのか分かりませんが、仕事も当然できなくなっていく。それを見て、父は撤退を考えたということだと思います。日本共産党からの指令もあつたのだと思いますが、そうやって一九六六年の十二月に日本に帰ってきました。当時何家族もいたわけですけども、その人たちの撤退を指揮しながら、自分たちは最後に撤退するということで、二カ月ぐらいかけて撤退しました。

現在、大連外国語大学に学校の沿革を展示する場所があります。先日講演に招かれた時に案内されました。そうしたら、何とそこに僕の写真があるのです。中学校の時の写真です。当時、日本からこれだけの人たちが来て、中国の日本語教育の礎を作ってくれたとはつきり書いてあるわけです。よく見ないと分からないことですが、その中に日本人の「名單」と書かれたものがあります。日本人教員のリストです。案内役の中国の学生にはその意味が分からなかったようですが、僕は見てびっくりしました。それは撤退した時のリストなのです。何月何日に誰と誰が離任した。それを中国共産党中央に報告した文書なのです。この男はここで離れた、家族は一緒に行った、と。そうやってずっと見ていくと、最後に関根庄一という父の名前が出てきて、家族と一緒に帰ったというのが記録されているわけです。僕は見てもう胸がいっぱいになりました。こういうのが残っているのかと。父の足跡を見たという感じもしました。大連外国語大学は今までいろいろな力を尽くした先生方ということと写真を載せているのだけれども、その中には文化大革命中に大変な迫害を受けた人たちもいるわけですから僕が聞いた話では、七十数名いた日本語のスタッフの

うち七人は自殺したと言っていましたから、大変な時代だったのだらうと思います。そういう意味では、父の撤退と

いうのは正しかったらうし、もし僕が残っていたら大変なことになっていた。というよりも、もう全然皆さんとお会いすることもなかったらうと思います。海外の係累がある人たちは全員やられましたから。僕の友達も、僕の写真を持っていたというだけで批判されて、ひどい目に遭ったというのを後で聞いています。そういうふうにして日本に戻ってきたのが一九六六年十二月。そして、一九六七年に定時制高校に入学するわけです。

長堀　ありがとうございます。では、帰国されてから、特に高校に進学されてからはどうだったのでしょうか？

定時制高校に入って勤労学生に

関根　帰国後、共産党は父たちがどうしていたのかをかなり調べたようです。よく覚えていませんが、代々木か世田谷か新宿だったか、共産党が借り上げている民家に、随分長い間いた記憶もあります。一定の期間のそういう手続なのか調査なのかが終わった後、共産党の『赤旗』の編集局

に父は入りました。

僕は、二年以上も中国の教育を受けたことになるのですが、中国の友達はみな紅衛兵になっていて、僕自身もその当時は紅衛兵は正しいと思っていて、僕もなりたいたなと思っていました。そのようなことだったから、帰ってきて、日本の同学年の人たちを見ると馬鹿みたいに見えるのですね。「何やってるの、この人たちは」と。「革命の情勢」がこれだけ昂揚しているのに、この連中はのほほんと学校に通っている。そういうことではいけないのだということ、僕は働きながら学ぶというのが当然だと思って定時制を選ぶのです。もう一つの理由は、当然のことながら僕の内申書というのは日本の先生には書けませんので、せいぜいオール一か二ぐらいにしかならず、普通の高校に入ることはもう全く問題外でした。ただ、定時制なら受け入れてくれますので、試験を受けて入りました。

定時制ですから昼間は働かなくてはいけないというか、もうぜひ働きたいと思って、父たちから紹介されて衣料関係の工場の配送部門に勤めることになり、これで労働者階級の一員になったということで非常に意気高く臨んだのですけれども、行ったところが何と女性の下着を作る会社だ

ったのですね。これはもう潰れてしまいましたけれども、株式会社ローズという通信販売主力の会社だったのです。

僕は毎日ブラジャーとかパンティとかと取り組むという、どうやってもやはり、なかなか「革命」には結びつかない時代だったのです。

ただ、定時制は面白かったですね。ベトナム反戦運動が盛り上がっていくころでした。高校の友達も、今の定時制とは全く違っていて、ほとんど仕事をしている人たちでした。看護婦さんとか、何らかの家庭の事情で普通の学校に行けない人たちとかで、授業はしっかり進んでいたように思います。

その時、自分なりに一生懸命やってきたつもりだったのですけれども、下着の工場が通信販売で業績を伸ばし、それを今度は大きな企業が吸収合併することになって、僕が一年目の終わりぐらいに合併されてしまうわけです。それで全員解雇ということになって、労働組合はすぐに争議団を作りました。その時十五歳でしたが、僕もその争議団の中に入って一緒に争議に参加していました。争議団は活動を維持するためにいろいろな組合を回って支援を訴えながら物を売り、それを資金にして争議を続けるということをや

ったわけです。東京都内のいろいろな労働組合をかなり回った記憶があります。

その後、争議に勝利し、結局退職金も出て争議団は解散ということになるわけですが、それがちょうど定時制の一年から二年に上がるぐらいの時でした。争議団も解散ということになると、いよいよ本当に何か考えなくてはいけなくなって、いろいろ考えた結果、全日制で勉強しないといけないのではないかということとで、一年遅れという形ですけれども、大量に編入者を受け入れていた千歳丘高校の編入試験を受けて入ったわけです。たいてい履歴書というのは高校卒業からなので、千歳丘高校卒業からしか書いてないのですが、実はその前は、こういう面倒臭いことをやっていたのです。

長堀 とても面白くて、聞き入っていました。千歳丘高校の全日制に入って、それから慶應に入ることです。そういう十五、十六、十七歳ぐらいまでの経験というのが、その後をかなり決めていったのではないかと思います。

ところで、お父様が編者の『翼は心につけて』がヒットしたのは何年ぐらいですか。

関根 あれは、七〇年代の終わりぐらいだったかな。

吉川 映画化されて、こちらは一九七八年公開とあります。

関根 『翼は心につけて』は、鈴木亜里という骨肉腫の女の子が、がんということが分かった上で、それでも必死に勉強して和光高校に入っていく実話をもとにしたものです。映画は、石田えり、フランキー堺、香川京子といったそういうたるメンバーが出演しました。人はやはり希望を持って生きていかねばならないという強いメッセージを伝える作品なのですけれども、これを編著のような形で、様々な人の証言を集めながら鈴木亜里のことをまとめていくのを父がやったわけです。鈴木亜里の家庭教師をやったのがうちの妹で、僕もいろいろな形で応援はしていました。この本はもう大ヒットして、映画化もされたのです。この前これがDVDにもなりました。

父はそういう成功があり、その後、教育評論を書きながら教育の世界ですごく売れるようになっていきます。そのあたりで共産党との関係がまづくなっていたようです。共産党と父の間で本当は何があったのか、外から見ていただけですから僕には全く分かりませんが、いろいろなことがあったのだらうとは思います。父は最終的に共産

党を離れる、あるいは共産党のほうから見れば除名したということになるのかな。実際の文書とかを僕は見たわけでもないで分かりませんが。

でも、教育評論家としては名前が通っていて、TBSラジオの朝の番組とかで教育相談コーナーを、土日を除く毎日ずっと受け持っていたということもあります。そういう成功ということがあります、自分自身が力を得てきているということと組織的な動きというものと、どこか矛盾があったのかもしれないなと思いますけれどもね。

埼玉での高校教員時代

長堀 慶應の修士をお出になっていますが、その後十年近く高校の教員をされていますよね。ここから西安外語に行って研究者の道に進むという流れを簡単にお話いただけますか。

関根 大学では、結局中国文学専攻に進みました。最初是中国文学に行くつもりはなかったのです。僕が中国語受験で合格していたことから、当時中文には村松暎先生だとか藤田祐賢先生がいらっしゃったわけですが、おまえは当然

中国文学専攻だろうということになり、余り深く考えないまま中国文学を選んだような気がします。現代文学を選んで、魯迅をずっとやり始めるのがこの頃です。卒論にしたのが、魯迅論の中でもちよっと変わった、文化大革命の四人組のうちの一人・姚文元が書いた魯迅論でした。姚文元の魯迅論は中国で出た途端に日本語に翻訳されていたような気がしますけれども、僕はそれを非常に不愉快に思っていて、批判するものを卒論にしたのです。

その頃になってくると、中国の紅衛兵運動などからかなり離れた独自の考え方ができるようになってきていて、当然日本で様々なものを見ていて、変わってきていたのだろうと思います。中国からの一種の拘束ではないけれども、思想的な従属関係というのかな、そういうものは切れたと思います。逆に、魯迅を学ぶ中で権力という姿が別な形ではっきり見え始めたということがあるのかなとも思います。それから、父が共産党関係の仕事をしていたこともあり、普通の就職は考えないほうがいいなと思い始めていたのです。それもあって、ここまで来たのなら徹底的に研究していくというのかもしれないということで、就職活動は一切しないで大学院を目指しました。学部四年の頃に学生結婚

するのですけれども、生活のこともあるので、大学院では今度は教員免許をしっかりと考えました。公務員だったら思想的な問題とか、あるいは家の誰が何をしているとか、そういうことは関係ないだろうということで、公務員を受けて埼玉県の教員に採用されて埼玉県に行ったという流れです。

最初は新設校に行く。これはもう選びようがないのです、配属されるわけですから。四年目の新設校で、生徒たちはやんちゃではあるけれども、素直な子供たちが多かったように思います。そこで自分なりには青春を謳歌したというか、教員としてのスタートがそこだったので、特に生徒たちとも全力でぶつかっていった気がします。教え子たちとはいまだに連絡をとっていて、時々集まってくれますけれども、僕の教え方について、「関根先生は子供扱いしなかった。我々を大人として見てくれていた」ということを言ってくれました。あの当時僕は必死だったから全然覚えてないですが。

四年たった時の転勤の希望で、僕は大学院で勉強していたこともあるので、ぜひもう少し深めたいという思いもあり、定時制に行けば昼間はあくだろうということで定時制

を希望し、川越高校の定時制に転勤になったのです。実際に行ってみると全然違って、昼間からもう大変忙しい毎日でした。その定時制の教え子でも、今でもつき合っている人たちが随分います。看護婦をしながら一生懸命勉強していた人や、あるいは川越少年刑務所の刑務官や管理職の人たちとも来ていました。他には富士見市役所の課長クラスの人や、幼稚園の園長先生とか、すごく生徒の幅のあるところでした。

僕は、『源氏物語』だとか、森鴎外の『舞姫』とか、今の全日制の高校でも必ずやるだろうけれども、あまり深入りはしないようなものにも徹底的に深入りして、生徒たちにもいろいろな教材を作って渡して、みんなで考えるということをしてきました。それは、とても僕にとって財産になっているような気がします。つまり、外見でいろいろな判断しないで、実際飛び込んで彼らの話を聞いてみると、全然違うことが見えてくるのですね。

僕は柔道部の顧問をずっとやっていたのですが、柔道部には川越少年刑務所の刑務官で三段とか四段とかいう人がいて、圧倒的な強さを持っていました。僕はその人にいろいろ柔道の技を教えてもらって初段をとれたのですけれど

も、そういう人たちとのつき合いは非常に面白かった。同時にその少年刑務所にお世話になる人たちも生徒の中にいて。面白かったな、あの頃は。

刑務所はとんでもなく恐ろしい場所だと簡単に思われがちだけれども、実は一人一人の刑務官の仕事を見ていると、そんなことはないのですよね。一生懸命勉強したいと思うし、あずかっている少年たちの更生のためにどれだけ頑張っているか分からない。そういうのに触れていくと、いろいろな物事についてもっと考え直さざるを得なくなってくる。あの頃にそういうことができて、人間の表面的なことではない深いところの姿を信じるべきであるということや、何か希望を持って生きていくという強さを学ばされたというか、ほかのところでは多分できなかった経験をしたのではないかと思います。

西安外国語学院へ

長堀 その後、西安に行かれるのはどのような経緯だったのでしょうか。

関根 学校群制度などの教育改革の中で、定時制に來た子

たちは昼間働くわけではなく、昼間予備校に通って、次に全日制に行けるように頑張るといふ時代になってきます。そうすると、全く面白くなくなるのです。あるいは勉強に對する意欲を全く失っている。このままここにいてもどうしようもないのではないかと思うような事態が九年目、十年目に現れてきた。

もう一つは、日本と中国との關係が急速に改善されていくのです。国交回復があり、その後中国との關係がいっぱい広がっていきます。僕のところにも、全然違う実業界から話が来たりして、「ああ、日本は動いているのだな」というのをすごく思いました。何か居ても立ってもいられなくなるといふか、何とか中国との關係を持ちたいと思つて、当時経済学部中国語の立間祥介先生と親しくしたので、立間先生のところに相談に上がったりしました。

その当時、八二、三年頃、檜山久雄先生とか松井博光先生など、中国との關係が回復していくときに、どんどん中国に渡つていつて、立間先生も向こうで執筆されたりもしていたのです。短期留学というのはまだあまりなかったのですが、中国に行きたい学生はいるのだけれども、中国語ができる大人が必要だといふことで、その当時まだ「浪

人」中の竹内良雄さん（現経済学部名誉教授）と僕がそういうことの取りまとめを引き受けました。そうした中で、西安だったら紹介するからといふことで、一九八八年に西安外国語学院の専家として一家を連れて行くことになったわけです。西安に行つた翌年の一九八九年には天安門事件が起こつています。僕は、文化大革命に続いて天安門事件も目撃することになってしまふわけです。その頃は、日本に帰つてくる気持ちはあまり持つていませんでしたね。

これはきつと後の話題になるのだらうと思うけれども、ともかくその滞在中に自分の興味でいろいろなところを見ていた時に、偶然見つけた本が阿壠の小説『南京血祭』だったのです。

阿壠の文学との出会い

長堀 ここまで関根先生の前史が分かつて、その後の研究につながっていく話題が出てきました。今度は関根先生の学問に入つていきたいと思ひます。関根先生の研究には幾つか柱があると思うのですが、まずは何といつても阿壠の研究で、これは日本に限らず、この分野のトップランナ

ーであることは間違いないわけです。次に、胡風研究で、日本の研究者は何人かいらっしゃるわけですが、関根先生はその代表者の一人と言えます。さらに、同時代の中国文学の翻訳と、大きく三つぐらいの柱があると思うので、これについてお尋ねしたいと思います。

関根先生は今回、『抵抗の文学——国民革命軍将校阿壠の文学と生涯』という博士論文を慶應義塾大学出版会から本としてまとめてお出しになったわけですが、阿壠との出会いについても少し詳しくお話しいただけますか。

関根 はじめて『南京血祭』を見た時、中身は全く期待してなくて、このことは『抵抗の文学』の中でも書いているのですけれども、いかにもステレオタイプな表紙で、魅力に欠ける装丁だったのです。僕はもう期待もせずに読んだんだけど、読んでびっくりしたんです。これはとんでもない本に当たったなと思って、ぐんぐん引き込まれていったのですね。何でこの人はこんなことを書くのだろうと。南京大虐殺、南京事件というのは、もう既にステレオタイプもでき上がっています。例えば周而復の本などです。そういう中で、阿壠が書いているのは、何よりも南京の悲劇がなぜ起こったのかというのを、中国の側から、国民党軍の抵抗

の仕方だとか、そういう中国の弱さがあったのではないかということに非常に詳細に点検している。その中で、必然的な敗北の道と同時に、敗北ではあるのだけれども、この敗北の先に中国は勝利するという、最後の最後になった時に立ち上がっていく人々の姿を彼は書いている。そういうところがこの作品のすごさです。

それともう一つは、圧倒的といわれる日本軍の姿を書いているのだけれども、その日本軍を構成する日本兵が、実はみんな同じく人間で、同じように様々な悩みを持っているのだということに目を向けている極めて稀な本なのですから、つまりステレオタイプは全くないわけです。僕はこの作家は一体何者かということで研究を始めるわけです。ですから、「遅ればせながらのスタート」だったというわけですから、長堀 櫻庭さんから、阿壠や『抵抗の文学』に関連してお聞きすることはありませんか。

櫻庭 『抵抗の文学』で最初に「ルカ伝」を挙げ「エルサレム、エルサレム預言者たちを殺し」という部分を取り上げておられます。イスラエルの首都であるエルサレムは、主なる神の民の、神の言葉を伝える働きがなされるべきところなのに、その民は預言者に耳を傾けずに主を殺して

しまうわけですよ。それから、この本の最後に有名な「マタイ伝」の第五章、「幸福さいはいなるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり」をあげ、そして「汝らは地の鹽しほなり……汝らは世の光なり」と有名な言葉で締めているわけですが、これに関して関根先生は別な言葉でこのように説明されている。「阿壠の文学観の根底には宗教的、哲学的な境地から生じる人間の尊厳と自然への畏敬がある」と。ただ、阿壠自身は宗教というのを前面に押し出さなかつたと思うのですが、それで関根先生に、なぜ阿壠をこういう形で見たのかというところをお聞きしたいと思います。

関根 僕はやっていてすごく思うのは、この人たちの文章は難しいですよ。なぜ難しいかというと、その時代において書いていて、真つすぐ直球で出せないし、また出すべきでもないのかもしれない。もつと言葉を使って説明したい。彼は言葉の人だと思うので、それを一生懸命説明する。その時にぐつと宗教的な哲学的な思索に入っていく自分というのを見詰めながら。一方で、いや今の課題にはこうした統一の課題もあるしという、そういう政治的な欲求というのも当然片方で持っている。これをやっていくから、

僕らは読み解く時に、そのどちらかに偏つて読むとおかしくなるのではないかと思うのです。ただ、文芸の世界から見て阿壠が最も輝いているのは、やはり阿壠が自身の複層的な思いを文学に昇華しようと必死にがいてきたからだと思います。

これが複雑だということをもう一つ言うと、阿壠は一九四五年の日本の敗戦の後、中国は内戦の時期に入っていくわけですが、この間ずっと国民党軍の高級将校であり、なんと最終的には一九四九年に大佐に昇進しているのです。陸軍参謀学校の教官にもなっている。南京で調べてみると、ちょうど彼が南京に行つた時に、南京にこの参謀学校も重慶から動いてきているということが分かるので、いま阿壠の伝記とか実績を年表風にまとめるということは中国でもかなり進んできているのだけれども、これは実は大変なことを意味しているのではないかと思うのです。というのは、一九四九年、彼の目から見れば、彼が本当に待ち望んでいた、人間性が最高に守られ發揮できる、自由が最高に輝く、文芸がどんどん發展していくだろう、中華民族の新しい本当の夜明けのようなものがやってくるという時に、彼は国民党軍の将校の最高位に入ろうとしているわけでは

よね。その中で書いている文章だということを考えると、これはそう簡単にいいかないところがあるのではないかな。

ただ、彼が必死に書こうとしているのは、特にタゴール論の中にあるのだけれども、彼は自分では嫌がっているところもありながら、超越する存在、超越者との会話・対話というか、超越者の思いは何かという、そのところにどうしても触れざるを得なくなってきた。余りにも悲惨な人生が続いてきたから。そういうことを感じますね。だから、そのところの読み取り方は非常に難しいところがあるかもしれないと思うのです。

櫻庭 その面で、この『抵抗の文学』というタイトルは本当によくつけられたなと思います。個を圧殺する権力に対しての抵抗というのは分かりやすいのですけれども、抵抗にはもう一つの意味があるように感じました。タゴールのところで説明されていますが、阿嬭はタゴールに対して距離を置きたいと思いつつ、あるいは批判をしつつやはり惹かれていく。だが、タゴールに倣って安易に宗教的なものに逃げ込むことは拒否する。なぜかという、目の前に非常に過酷な現実があるわけです。そこで政治的な立場を崩してしまつたら崩れてしまうわけですね。ですから、

調和のとれた平和のある神の国、そういった国に行こうとする。だけでも、それを今やってみたら自分が崩れてしまふという、その非常にアンビバレントな、矛盾した状況の中で行きつ戻りつという阿嬭のこの迷いというのは、タゴールとの関係のところで見たらよく出ているのではないかな。それで抵抗というのは、やはり二重の意味があるのかなと思います。

関根 なるほど、解説してもらつた（笑）。でも、もともととは、出版社と話した時に、『抵抗の文学』というのはよく分からないから、『毛沢東の罪人』にしませんかと言われた。『毛沢東の罪人』では中国で翻訳出版する際には、多分アウトになるだろうなと思って、こういう落ち着いたタイトルにしたのです。

長堀 大分白熱してきましたが、『抵抗の文学』について若干補足しておくと、第四章の南京についての詳細な記述、そのほか日本の戦争小説との比較、阿嬭の結婚と恋愛の問題、どれも非常に面白い章ですので、今日は時間に限りがあつて関根先生にこの辺は思う存分には話してもらえませんが、そこは読者の皆さんには是非、実際に本を読んでもいただきたいと思っています。

ちなみに、中国で翻訳出版の計画があるということですが、進み具合はどうなのでしょう。習近平政権の今の言論状況の中で、これは出るのか出ないのか。大丈夫なんでしょうか。

関根 『抵抗の文学』をいろいろと取り沙汰していただいて有難うございます。中国では、僕が親友と思っている李振声さんという復旦大学の現代文学の研究者が、今かなりの部分まで翻訳を進めていて、多分夏休み中に仕上げるのではないかと思います。李振声さんは現代文学の研究者でもあるので、この書いている内容について非常に興味を持ってくれています。僕がこの本で使っているのは第一次資料的なもの、つまりほかの研究者が使っていない資料もかなりあるので、最近翻訳の内容の質問が来ているのですが、僕が手元に持っている資料を確認して送ってくれとか、そんなやりとりをしているところですよ。

中国では、それなりのことを考えてやってくれていると思います。『阿壠全集』の今年中の刊行を目指しているのですけれども、『阿壠全集』出版と軌を同じくして、阿壠の伝記・評伝として僕の本を同時出版したいという話が進んで、大変有り難い話だと思っています。だから、これが

出るかどうかというのは、『阿壠全集』自体とかかわるわけですよ。

長堀 ぜひ出てほしいものです。では、次に胡風研究についてですが、これについては教え子の吉川さんから口火を切って下さい。

胡風との出会い、そして村松先生

吉川 まず胡風とどのように出会ったのか、なぜ胡風に注目したのかというところですが、これもやはり阿壠からということでしょうか？

関根 やはりきつかけは阿壠です。ただ、『南京血祭』を見た時には、胡風とか胡風事件とか、そういうことは一切書いてなくて、何も分かりませんでした。そこで彼らの取材を始めたということが最初なのです。そしてその中で胡風という巨人の姿が見えてきたということです。胡風は一言で言ったら文芸思想家と言うべきなのかもしれない。そのところを調べていくことになったのが最初です。

吉川 中心的な存在であった胡風にはやはり言及せざるを得ないというか、どうしても関わっていくことになるとい

う感じだと思うのですが、胡風研究に対する関根先生のスタイルとして、論文として研究をまとめて発表していくというよりも、『胡風追想』や、近年のものだと一緒に字幕翻訳をやった彭小蓮監督の『紅日風暴』など、翻訳中心という印象を持っています。そうした業績を見ていくと、胡風事件の家族や当事者の証言とか、ドキュメンタリー映画であるとか、実際に関わった人たちの言葉に惹かれていくような、別の言い方をすれば寄り添っていくような特徴を感じるのですけれども、先生ご自身としてはどのようにお考えでしょうか。

関根 『胡風追想』（梅志著関根訳、東方書店、一九九一年）は、実は胡風夫人の梅志さんに阿壠のことをいろいろお尋ねしていつているその途中で、『往事、煙の如し』という彼女の著作についての翻訳の計画が出てきて、ではこれは僕がやりますということをやっていたのです。僕は何回も梅志さんにお会いして、いろいろな話を聞いていましたし、『胡風追想』に関しては、梅志さんの胡風に対する深い思いというものを感じました。梅志さんというのは本当に素敵な老婦人だったのですよね。非常に上品で、胡風を深く愛していたのだなということがよく分かります。

梅志さんから沢山の人を紹介してもらい、それで僕は阿壠や胡風と関わるいろんな人を回っていったわけですね。

やはり一番根本にあるのは阿壠なのですが、阿壠が付き合った文学者たちは、こぞってみんな大変な迫害を受けているわけで、彼らの言葉は重い。それを何とか伝えたいということが『胡風追想』にもあるし、『紅日風暴』のほうにも出てきます。中国ではよく胡風派と言われるわけですが、阿壠を含む胡風派の文学者、彼らの人生とか文学というものが、どれだけ厳しいものだったかというのに接していくと、やはりどうしても普通の感情では書けないというか、そういう気がしています。

吉川 その『胡風追想』が出るのが一九九一年ですが、翻訳の過程での思い出などあります。

関根 『胡風追想』翻訳の時に、実は中文の恩師の村松先生と相談しているのです。村松先生が、『胡風追想』の訳稿を徹底的にチェックしてくれたのです。もう真つ赤になるまで見てもらいました。村松先生がよくおっしゃっていたのは、「こういうのは一回だけね」と言うのだけれども（笑）、もう徹底的にチェックされました。僕の最初の著書は『中国の教科書の中の日本と日本人』（一光社、一九八

八年」という西安の頃書いたもので、これはもうほとんどノーチェックだからぼろぼろですけれども、この『胡風追想』に関しては半分以上、村松先生のまっ赤っ赤の文字が入っていると思っただけだと思います。だからこれはかなり厳密な訳になっているはずですよ。村松先生からは、実は、『胡風追想』と、その後の格非の『時間を渡る鳥たち』という新潮のコンテンポラリーノベルスの訳稿も見てもらったので、僕は二回も村松先生の真っ赤になるチェックを受けており、そういう意味では非常に幸せだと思います。二回もこんなにお手数をかけた弟子はいないのではないかなと思いますね。

長堀 村松先生にそこまで真っ赤に、二冊もやってもらったというのは稀ですよ。

関根 稀です、本当に稀ですよ、これは。

長堀 そんなことをやってくれる先生は、もういないですよ。

関根 いないと思います。本当にそうだと思います。

長堀 村松先生が文革の時にされた勇気ある発言だとかを見て、恐らく胡風に対して初めからかなり共感を持っていたのだろーと思えますね。その表れなのだろうという

感じがします。

関根 たしかに、胡風に対しては村松先生も思い入れがあるのですよね。村松先生自身が胡風の名前を見た時、「ああ、懐かしい名前だ」と思いながら僕の翻訳を見られる。だけど関根の翻訳が余りにもまずいから、直すのに必死で、この中身をしっかりと味わう暇がなかったと村松先生はおっしゃっていました。

村松先生は『紅樓夢』研究の日本でのトップランナーで、俞平伯と親交がありました。先生が中国に行った時に俞平伯とも会っています。その後、一九五四年に俞平伯の紅樓夢研究に対する批判というのがあり、俞平伯批判がもうそのまま胡風批判につながっていく。ある意味で胡風批判のステップなのかと思うぐらい密接な関係があって、先生はそのところをよく分かっていらした。後に村松先生が言っておられたのが、一九五七年に中国に行かれた時に大接待を受けたのだけれども、その時、俞平伯氏はどうなっているかと聞かれたらしいのです。それに対して、聞かれた人は本当に困って、どう答えていいのかわからない様子だったということでした。それはもう反右派闘争が始まっている時で、「ああ、僕はとんでもないことを質問してしま

ったな」と思ったとおっしゃっていました。

胡風が一九三〇年以後の文化界を振り返り、問題点を指摘して建白・提言をしたという『胡風三十万言書』についても、どうしてその時期にそういうことを書いたのか、何であの時代を読めなかったのかということ、村松先生は残念そうにおっしゃっていました。それはほかの人も言っていることだろうけれども、実際にその当時の兪平伯を知っている先生がおっしゃると、直前の兪平伯だっただけで、考えさせられました。胡風がこういうふうになるということに対する文人としての同情というのかな、それは違う立場でも先生は非常に強くお持ちだったと思いますね。

彭小蓮監督『紅日風暴』の字幕翻訳

吉川 村松先生の思い入れということが出ましたが、関根先生と一緒に、彭小蓮監督の『紅日風暴』の字幕翻訳をして、彭監督を招いて交流イベントをした時に、関根先生のパッションというか、この作品を紹介するんだという大変な情熱を感じました。彭小蓮監督と共鳴するような、そん

な情熱を感じたのですけれども、彭小蓮監督や『紅日風暴』についての関根先生の思い入れというのはどうでしょうか。

関根 彭小蓮監督というのは、彭柏山のお嬢さんで、彭柏山という人も胡風派とされた人の中では非常に残酷な最後を遂げた人です。ある意味では、彭柏山はもし監獄にいたら生き延びていたかもしれない人ですよ。阿壠は体を壊してしまっただけでしたが、もし体がしっかりしていたら、無事に文化大革命が終わった後に出てこられた人なのかなという気もするのです。逆に、街に出されてしまった、いわゆる群衆による管理、大衆の監督によって思想改造をするという処分になった人たちは、もうめちゃくちゃです。胡風に関係していたというだけで、彭柏山は殴り殺されているわけですが、そのほかにも殴打される合間に自殺した人などもあります。大腿骨を折られて、這って家に帰って、翌日また批判闘争があるということで、翌日の批判闘争に出ないで井戸に這って飛び込んで亡くなったという、馮大海という人の話も聞きました。

彭柏山が撲殺されたように、そういう残虐というものが文化大革命の時にあって、それを彭柏山の娘である彭小蓮

監督はどういうふうに受け止めているのか。彼女の場合は、感情的には全然整理されていないと思いますね。ただ、絶対に許してはいけないのだという思いが、ああいう作品になっているのかなと思います。彭小蓮さんのほかの映画、例えば『上海家族』とか、すごく厳しい家族の側面もあるけれども温かさがあるわけで、それと『紅日風暴』がこんなにも違うところにくぐく打たれるところがあって、僕の力が及ぶものであれば何とかしたいというふうに思いました。

長堀 彭柏山の話も出てきましたけれども、胡風も含めて、魯迅のほうから言うと、魯迅の弟子筋は、結局新中国では誰一人として残らなかったということがありますよね。

ここまで、阿壠から胡風とその周辺の話題をお話しいただいていますが、胡風と阿壠の違いみたいなところを、関根先生はどんなふうに見ていますか。『抵抗の文学』の中でもちよつと出てくるのですが、興味深い点なのでいかがでしょうか。

阿壠と胡風

関根 語弊があるかもしれませんが、胡風については、例えば『三十万言書』にしてもそうなのだけれども、中国共産党、毛沢東主席という路線に対しては、自分は最も忠実な実践者であるという自覚を相当強く持っていたのではありませんかと思うのですね。ですから、政治的な立場として、組織との関係性をかなり強く持っていたのが胡風であると。

それに対して、阿壠は非常に理念的な人で、個人の本当の主体性を發揮する中で真実に接近していくというのが彼のやり方で、阿壠から見ると共産党がそれをやってくれるというか、そういう閉塞した社会の中で共産党こそ、真の個人の解放、人間の解放を目指す組織であるというふうに思っていて、実際そのために、彼は国民党の将校だったわけだけれども、共産党に沢山の情報を流していくということをしたわけです。

だから、出発点において組織に対する距離感が二人は違う。胡風は日本で共産党に入党していますけれども、阿壠は国民党の黨員だったことはあっても、共産党の黨員にな

ったことは一度もないわけで、そこら辺の距離感が違うということはまず言えるのかなと思いますね。

長堀 胡風は関根先生がおっしゃったように毛路線に自分なりに忠実だと思っていたのでしょね。魯迅逝去一周年に延安で毛沢東が行った講演『魯迅論』を最初に載せたのは、胡風の雑誌『七月』でした。

関根 そうです。

長堀 そういうところにも、先ほどの村松先生の話ではないけれども、空気が読めない胡風の特徴が出ているのかもしれないですね。

いま関根先生がおっしゃったところで、阿壠の理想主義的な個人の主体性を重視するという姿勢というのは、『抵抗の文学』第五章の阿壠の詩論で、阿壠の言葉についての考え方とか詩の言葉についてのセンスというところを読んでいくと、強く感じます。胡風は何とか政治の世界でやっていく、あるいはそれでやっていけそうだと思いつながら自分のそういう方向性を間違えてしまったみたいなどころがあるのだけれども、阿壠という人はどうなのでしょう。本質的に政治の世界に合わないとか、詩論とか詩を読んでいると、そんな感じがしたのですが。こういうセンスの

持ち主は、恐らく共産党みたいな組織の中ではやっていけないだろうな、というような感想を持つのですけれども。

関根 全くおっしゃるとおりですね。例えば、詩を取り上げてみると、胡風の詩というのは、一番有名なのは、『時間到了』、時間が来た、時が来たみたいな、一九四九年の建国の感動を伝える大変長編の詩があります。それはもう完璧に毛沢東の姿を詠っているわけなのだけれども、阿壠にはそういうふうな詩は全くないですね。

阿壠は、もっと前から、国民党の将校だったところから沢山の詩作を残していて、その一つ一つが非常に強い象徴性も持っているし、また詩情的な自分の思いを強く伝えていく。その思いというのは、例えば相手が国であったりということもあるけれども、民であったり、愛する人であったり、そういう彼にとつての明確な具体的なものを抱いていると思うのですね。だから、本⁷当⁷言⁷うと彼は「詞」の方ですね、古典の詞などでもすごくいい作品を残しているのです。だからそういうのは、ある意味では伝統的な詩文のセンスということかもしれないけれども、本⁷当⁷の詩人だと思えます。

それから、僕が『抵抗の文学』の中で書いているのは、

象徴性、シンボリズムが持っている韻に対する考え方とか、格律に対する考え方です。阿嬭は本当にそういうところを共有しているのですね。そういう詩人としての特性というものがあると思うのだけれども、胡風にはそういうものはないと思いますね。胡風が詩人として認めているのは、割とプロパガンダ的なものを激しく言う人で、中国のある研究者は、胡風から見れば阿嬭の詩は多分受け入れられなかったのではないかということ指摘している。

中には、阿嬭の詩は「危ないな」というか、非常にいい詩なのだけれども、当時の時代には合っていないというのはいっぱいありますね。阿嬭の詩は今インターネット上で、全く関係ない形で背景も全く無視して出回っているのだけれども、結構これが評判いいのですよね。それはそういうことだろうと思う。

櫻庭 阿嬭の詩については、関根先生は『抵抗の文学』三二六ページあたりでふれられていますね。阿嬭にとつて、まず言語は「人格の声」であり、「詩人自身の体温を保つ」「生活と生活の言葉であり、人格の声」であった、ということを書かれています。「消滅し得ない『個性』が『集団』の対立物であることを認めつつ、その集団というもの

は桎梏の結果ではなくて、個性と個性を結ぶ統一でなければならぬ」と説き、個性が解放されて自由を得たとき、はじめて豊かな統一が実現する」と。だから、これは本当に先ほどおっしゃっていた個人の主体性を重視するということとを徹底的に、最初から最後まで恐らく変えなかった論点だと思ふのですね。

それプラス、詩人としての阿嬭というのは、リズムとか格律とかいうものを重視した。詩というものはメッセージと同時に、そういったリズムなども重要ですよ。リズムなどは、本当にその個人、一人一人全く違うわけで、阿嬭はそれを犠牲にしてメッセージ性のほうに収斂されていくようなものは受け入れられなかった。その面で言っても、詩人として非常に言葉に誠実であつた人ではないか。誠実さをもし貫くのであれば、当然、政治的イデオロギーのほうとは、あるいは統一しようとするベクトルとは違った方向に行かざるを得なかったのだらう。ここに阿嬭の本質があるのかなと感じました。

関根 櫻庭さんには僕のかわりに、非常に深く読んでもらつて本当に有り難いです。そのとおりですね。この本の中で一番僕が伝えたいことをまとめてもらつたような気がし

ます。

胡風と郭沫若

長堀 少し話題は変わりますが、『抵抗の文学』の中で郭沫若と胡風の話も出てくるけれども、一九三〇年代末から四〇年代にかけて、郭沫若と胡風の論争の話がありますよね。その経過は、四九年以降のこの二人の運命を予め決めているような、そんな感じがするのですが、胡風批判の中で郭沫若というのはどんな役回りを果たしたのか、この辺はどうですか。

関根 郭沫若は、一九三〇年代後半の統一戦線政策、共産党の国共合作の路線の中で出てくる啓蒙活動は、抗日戦争のための宣伝の道具としてすごいものだということ、その革命における役割を重視していくわけなのだけれども、それに対して胡風はやはりこれは受け入れられない。そうではない。啓蒙、啓蒙と言うけれども、啓蒙の前に知識の向上、文化の向上というものがなくてはいけないので、全部が単純な民話とか民間芸能の形式で宣伝をするなんてことはやはりおかしい。きちんとした文化の向上に力を尽く

さなければいけないのだということを、すごく強く主張する。そうすると、郭沫若は、それはおかしい。今の時代そんなことを言っているのは、もう売国奴に近いというような論争があったのですね。

ところが、これは結局何かうやむやのうちに終わっていく。しかも、こうした経緯を確認していくのが結構大変で、というのは、こういう危ないものというのは文集から外されたりするので、最初に出たものに当たっていかなくてはいけなくなるわけです。ともかく、慎重に確認をしていくと、そのところに郭沫若が当時文壇においてどのように共産党の文芸路線を代表して統一の方向、国共合作、中央集権的な路線に全体を引き上げようとしていたのかということが非常によく分かります。

それに対して、胡風はやはり抵抗していたのですね、実は。抵抗していたのだけれども、そのうちに、余り抵抗していると危ないなということ、ちょっとトーンが下がってくるし、亡くなった後は本当に不思議なことに、どんなこういうことは文集からなくなってしまうのです。いずれにしても、そういう点ではまさにこの二人の三〇年代末から四〇年代にかけての姿というのは、二人の役割がその

まま出ていて、運命を予言しているというのも当たっていると思いますね。

長堀 郭沫若は中共の文化的なシンボルであるというふう
に、この時期共産党は規定しています。共産党は魯迅をま
ず文化的シンボルにして、亡くなってからは郭沫若だと。
これは共産党の決議で決めているのですが、魯迅の弟子と
しての胡風は、魯迅先生の後には郭沫若だということに対す
るある種の違和感があったのかもしれないですね。

余談だけでも、魯迅の葬式で、抗日統一戦線での民族
の象徴にするために、棺に「民族の魂」と書いた覆いをか
けますが、あれは絶対魯迅にとっておかしいなと思ってい
たのですが、やはり思ったとおり胡風と蕭軍という魯迅の
弟子筋は、魯迅先生に「民族の魂」はおかしいというよう
なことを言って葬儀の席で反対したというのが、章乃器と
いう抗日七君子の一人の回想録に残っています。

そういうわけで、魯迅と郭沫若は、創造社時代からのあ
る種の対立関係にありながら、政治的には郭沫若のほうが
寄り添ってくるような形で何とか三〇年代、四〇年代まで
行くわけけれども、一九三六年に魯迅が亡くなった後、
そういう魯迅との因縁みたいなものが胡風と郭沫若にも残

っているような感じもします。

当代文学の翻訳とその基準

長堀 それでは続いて関根先生の大きな仕事の柱の一つで
ある同時代文学、当代文学の翻訳について、これは同じく
同時代の翻訳をたくさんなさっている櫻庭さんから主に質
問をしていただきたいと思います。

櫻庭 私は、季刊『中国現代小説』を出していた「中国現
代小説刊行会」というところで関根先生とご一緒して、そ
の縁で翻訳に関する小さな論文を書く時に誘われたりして
おりました。

今回、同時代の翻訳について関根先生に幾つか質問をす
るようにということだったので、久々に同時代文学を読ん
でみて、あたりまえのことですが、関根先生は作家たちを
アトランダムに選んでいるわけではなくて、ある基準があ
って選んでいるのだなと感じました。

具体的に言いますと、中国では前衛文学、「先鋒文学」
と言いますけれども、その旗手である格非、『飢餓の娘』
の著者の虹影、そして陳染、張煒、史鉄生、李銳を訳され

ています。史鉄生、李銳は一九五〇年代生まれですが、あとは大体一九六〇年代生まれの、中国でも特色ある作家たちと言えると思います。それで、改めてお聞きしますが、翻訳紹介する際の作家の選択の基準というものはどういったものだったのでしょうか。

関根 端的に言って、個性の強さとか個我的意識を強く持っているかどうかということが第一で、そこから自分の置かれている環境とか状況に対して強い発信をできているのかということですね。つまりある意味では、それは社会に対する強い批判とか抵抗であったり、あるいは権力に対する力であったり、権力に対する自分の主張であったり。

もう一つ、割と僕が重視していることの一つが歴史です。近代史の中の自分たちが置かれた歴史について、いわば与えられたテキストがあるわけですね。特に近現代史に關しては。戦後史と言ってもいい。その与えられたテキストは間違っていて、本当の歴史というのとは別々に展開しているのではないか、というようなことを丁寧にやっているという姿勢があるかどうかということです。

そういう立場が、今挙げられた人たちは、書き方はそれぞれ違いますけれども、大体共通項目として持っているの

ではないかなと思います。そういうところに打たれると、やはり何とかしなくてはと。

実は、少し話は飛びますがけれども、最近翻訳に戻ろうと思っていて、いま新しい翻訳を考えています。ハルピンの李文方という作家の『ハルピンの物語』という非常に面白い作品があります。ちよっと年はとっている作家なのですが、やはり基本的に李銳などと似たような、自分の歴史に対する認識を印象派風に、ある意味では象徴的に展開できる力がある人です。張煒もそうですけれどもね。

櫻庭 関根先生が六〇年代世代の作家を挙げる時に、共同体の集団幻想に必死に立ち向かった歴史を持つ作家たちというようなことをおっしゃっています。近代史というものがつくりあげたひとつの枠を脱出しようとするような傾向を持つ作家たちについて、多分今おっしゃられたと思うのですが、共同体の集団幻想というのは例えばどんなことを想定していらっしゃいますか。

関根 一番大きな幻想は中華思想だろうと思いますけれども、中国という、我が民族はというふうに言って語られるナショナリティとか、それから新中国あるいは人民の中国とかいうイメージで語られる国家というのが、実は集

団のイメージとしてつくられている。近代の中でつくられたものは、実際は具体的なものはずなのですね。具体的に例えばどのような社会の仕組みを持っていて、人々をどういふふうに統括しているかということをつぶさに見ていった時に、いろいろな姿が見えてくるわけで、僕は例えば李銳の『旧跡』を読んだ時に本当にショックを受けました。よくやったなと。ここまで、中国史の無残さというか、残酷さを描き切った作品というのはないのではないかなと思うぐらいでした。自分の家族の歴史ですけども、それをしっかり書き込んだ作家だったわけですね。私を感じるのはそういうところですね。

櫻庭 あともう一つは、文化大革命についてですね。虹影の『飢餓の娘』の解説にあったかと思いますが、文革を頂点とする歴史を生き延びた者の持つ原罪の意識が、彼女の『飢餓の娘』の創作の核にあるということを書かれています。李銳は文革を一つの厄災と見ているわけですが、そういう文革に対する見方などが、作者を選択する基準にあるのかなと感じたのですがいかがでしょうか。

関根 そうですね。そのとおりです。

櫻庭 『飢餓の娘』の虹影にしても、関根先生が翻訳をさ

れているもう一人の女性作家である陳染にしても、中国の同時代作家の中では性の過激な描写のところでは有名ですね。二人ともそれが少し問題になりそうだった。ところが関根先生の翻訳紹介は非常にうまく紹介してあったと思います。この二人の女性作家における性というものの意味は、彼女たちの創作及び書くということの根源にかかわっているものなのであり、そこを逃がずに書いています。そうすると、日本で二十万部ぐらい売れた『上海ベイベー』の衛慧との違いはどんなところにあるのか、とそれをお聞きしたくなりますが。

関根 難しい問題ですね。僕は衛慧を選ばなかった。衛慧の作風というのはいろいろな現代のブランドとか、現代の風俗とか、そういうものをすごく大量に持ち込んでいて、その中で自分が性的に動いていく姿を描くだけけれども、そこでの彼女自身の非常に強い主体性というものが感じられないのですよ。僕はどちらかと言えば、彼女の作品は、そういうふうに動いていく自分が素敵でしょうと言っているように思うわけです。そういう意味での、一種の媚のようなものを感じて、ついていけないのだけれども、陳染は全くそうではないのですよね。彼女は社会と立ち向

かっているので、自分の持っている性が社会の中でどんなふうになっているのか考える。その中で自分が自分であるということ主張するためには、性を自覚しないと彼女はそこそこ到達しない。彼女の自覚の上で性というものは必要不可欠なもので、それを書き込まない限り彼女は出てこないという、そういう限界、ぎりぎりのところで書いていると思うんですね。虹影にも共通する部分があると思うのだけれども。

陳染の場合は、それを主張する中で、中国というこの社会が、新中国と言われたこの社会が、実は非常に強固な男の世界に固まっています、その中で女性の自立というものがどんなに大変なことなのかということを、非常に印象的に象徴的に書いている。彼女の『ブライベートライフ』の最後の場面というのは非常に面白いと思います。彼女がバスルームの中にこもって、そのバスルームの中にモンスターのような観葉植物を置いている。この植物たちはここに置いていれば絶対安全だけれども、これ以上大きくなることもないし元気になることもない。むしろ表に出せば、すごく大きくなるかもしれないけれども、あつという間に枯れるかもしれない。私はどうしたらいいのだろう。私は出て

いくべきなのか、残るべきなのか。こういうところでこの小説は終わっていくわけです。だから彼女が出たのか出ないのか分からない。この世界に飛び出そうとするのかしないのか。それを中国は受け入れられるのかという、そういう限界状況が、この陳染の中にはあった。

虹影について言うと、『飢餓の娘』は、大河小説と言ってもいいのだろうと思いますけれども、貧民街の中で育つて、もしかしたらその貧民街の中で朽ち果てていくかもしれないなかった、ある意味では虐げられてきた虹影という女性が、文字を手にして、表現することを手にして、そして海外にまで果立っていった、その途中で自分とは何かというものを自覚する。その過程での性というものは決定的なところになっているわけですね。

だから、陳染も虹影も子宮という発想が強くあって、子宮からの言葉と言ってもいいのかもしれないけれども、そういうことが説得力を持って語られていると思うわけです。一方、衛慧の場合だと、性的な風俗も含めて自分がこの社会の中で格好のいい先端を切った存在で、自分の生きざま自体が商品化されていくような、そういう書き方になっている。では、その中に強い批判力があるのかというと、と

でも陳染と同レベルでは考えられないと思っています。

かといって、では陳染とか虹影も全ての作品がいいかということになる、それはなかなか難しいことがありますけれども、そういう力を持っていた作品がこの二つだと思います。

中国当代文学の越境

櫻庭 有難うございます。もう一つお聞きしたかったのが、越境というテーマについてです。関根先生は二〇〇六年十二月の雑誌『アジア遊学』の企画で『中国現代文学は越境するか』という文章を寄稿され、そこで「越境することによる可能性」を言われています。文学の越境ということでは

いろいろな囲いがあるその境界を越えていく、越えていったところでいろいろな可能性が出てくる、と。その越境を行なった作家たち、そこに一つの中国文学の可能性を見えるということでした。改めて見てみると、虹影は貧民窟出身で、やがてロンドンに行き、海外で非常に認められる作家になっていく。そして、それがまた中国国内でも徐々に力をつけていくことになるわけですね。エリートコースを全く

辿らない彼女が、外国語も身につけながら書くという手段を獲得していくというのは、普通の状況であれば可能性は限りなく少なかったと考えられるのに、彼女は自分の出生による限界と教育の壁を突破したわけですね。突破したことによって伸びていつている、まだその過程のさなかにあると思いますが。

二〇〇六年から現在に至って、グローバルイズムと言われる状況になり、国家とか民族とか、そういったものに捉われないで書くということも中国の作家たちが意識し始めている中で、今の状況にある中国の同時代作家たちの「越境することによる可能性」について、どのようにお考えですか。

関根 答えになっているかどうか分かりませんが、僕の越境のイメージというのは、実際に越えていく、空間的に越えていくというのも一つ重要な要素で、そのほかにもいろいろな越境というのがある、それは精神的に超えることのほうがすごく強くて、その最たるものは史鉄生ではなかったかと思っています。

僕は史鉄生の作品の翻訳は一作しかないのですけれども、史鉄生が一番大きな作品である『務虚筆記』は常に意識し

てきていて、学生との間で何回も読んでいます。史鉄生はどこまで超えているかというところ、個であることを超えようとしている。自分が、あるアイデンティティを持った史鉄生という名前の人間であるということ、それを超えようとしているのです。ということは当然のことながら、中国の中華思想、中華意識を持った中国人の一部であるということとなんかとくに超えてしまつて、もつと自分が大きな人間のつながりの中、人間の意識の流れのつながりの中にあるということ、そういうところまで彼は行こうとしている。その思索の結果が『務虚筆記』になつていて、それは、ほかの作家が追いつくようなものではないのではないかと、そういうことすら僕は思うのだけれども、そうした超え方というのも意識したいと考えています。

格非の書き方というのは非常に分かりにくかつたと思うのです。僕が翻訳した中でも一番分からないのが、多分『時間を渡る鳥たち』だと思います。この『時間を渡る鳥たち』の中で描かれた世界というのは、中国人であることというのが、偶然に自分がそこに置かれている場の一つ、状況の一つにすぎなくて、自分はそのような様々な状況の集合体であるという意識があつて、そこでの実験をいろいろ

をやつていくのです。だから文体も壊そうとするわけです。

ジェンダー的に超えていく人たち、歴史的に超えていく人たちというのもそうですけれども、空間的な越境以外にも僕の意識するところです。逆に言うと、ルーツ文学的なものというのは余り好きではないのです。だから、莫言というのは僕の翻訳の流れには入つてこない人と言つてもいいですね。

櫻庭 今のお話を聞いて思い出したのですが、史鉄生について、例えば二〇〇八年の『三色旗』に発表された中で、こうおっしゃっていますね。史鉄生は「人間存在を固定された個の自我として考えず、幾筋もの意識の収束した流れ、幾人もの思いの集約した肉体として捉えている」と。個というものの、それ自体が一つに固定したものではない、人間存在の根源にかかわる問いとして、史鉄生はそれを捉えている。そのところで史鉄生を評価されている。だから、高行健の『霊山』についても、彼が語りの主体を変容させるといふその手法が一つの場に拘束されない存在、幾つもの可能性を秘めた主体性を確立したとし、その点を評価されているわけですね。

そここのところで、私は阿壠との関係がつながるのかなと思うのですが。

関根 全くそのとおりですよ。僕は阿壠と史鉄生の近似値のようなものを感じているし、史鉄生に最初に会ったのは阿壠の取材中でなんですよ。阿壠を取材していく中で、牛漢という北京在住の詩人という話した時に、「最近僕は史鉄生という人の作品はすごいなと思っているのです」と言ったら、「あ、史鉄生なら連れていくよ」と言っていて、すぐ電話してくれて、歩いて行ける距離で、史鉄生の家に案内してくれたのが最初だったのです。

櫻庭 先ほども話題になったように、文学を表現する時に個性が集団の対立物であることを認めつつ、その集団とは桎梏の結果ではなくて、個性と個性を結ぶ統一ではなくてはならないと阿壠は言っていて、個性に注目しているわけですよ。史鉄生はその個というものが一つの統一体である。それで、二人はある意味で非常に似た性質を持っている、似た捉え方あるいは同質の捉え方を存在に感じているのではないかと思ったのです。

それでお聞きしたかったのは、もう答えが出てしまったかもしれませんが、阿壠研究と同時代の作品を翻訳すること

との関係、つながりというのはどのようなのでしょうか。

関根 僕は、阿壠の存在自体が当時の状況を超越していると思っています。実際阿壠は獄死しているわけですが、それは彼が獄中にずっといて、全然自分を曲げなかったということですよ。文革中にどれだけひどい目に遭ったのかと思うのだけれども、それでも絶対に曲げない。

中国というのは実は法治社会ではないので、人間関係でどうにでもなるところがある。阿壠も獄中でうまく立ち回れば、もつとうまくできたのではないかと、僕が取材した人たちみんな言っている。でも、阿壠は絶対に妥協しないから、適当にやるということとはできないだろう、だから「一番心配だったのは阿壠なんだ」と。病人を殴ったり蹴ったりということまでもあったと言われる中、彼は脊髄カリエスになって死んでいく。それでも曲げない。阿壠のその行動にあった思いというのは、多分もう新中国がどうかではなくて、もつと違うものだったのだろうと思うのです。阿壠のそういう思いを見ていくことと、僕が翻訳の対象として選んでいるこの人たちというのは、どこかでつながりがなかったら、僕も選んでないかもしれないですね。

出発言語と到達言語

櫻庭 今度はもう少しテクニカルなことなのですが、翻訳の役割というか、どのような立場で訳者として出すのかという点をうかがいたいと思います。関根先生は先ほど、格非作品の翻訳についても村松先生がかなりチェックされたと言われましたけれども、今回久々に原文と邦訳の両方を読んで、関根先生の訳はすごくうまいなと思いました。格非の原文も言われているほどにはすごくないのでは、と思って読んだら、逆に非常におもしろかったです。ということは、一九八〇年代発表のあの作品は、二十年以上の生命を保ちつつ、今の時代性と合致しているわけです。あそこで格非が問うた人間のよく分からない部分は、今の私たちの状況にも十分通じるものであり、それをよく示している。と同時に、それを訳した訳者の言葉の選び方も非常にうまいと思うのですね。

それで関根先生がいろいろ訳されている時に、出発言語である中国語と、到達言語である日本語のどちらを重視するのか。伝えやすさ、メッセージ性を伝えようとするのか、

それともリズムを重視しているかとするのか。メッセージ性を伝えるほう、要するに日本語で分かりやすくするのか、それとも日本語だとちょっと分かりにくいけれども、やはり原文のある種のリズムなりを残したいというふうにするのか。その点をお聞きしたいなと思いました。

関根 いま出たので格非で言うと、格非の原文は非常に難解なものなのですが、格非がイメージしたものは何かということをすごく感じるのですね。そこに現代性を持っていると。それは単に中国だけでなく、日本の現状に対しても鋭いメッセージを持ち得るような作品だと思います。そうすると、彼の持っているイメージや問題意識というものを、中国語で描かれている世界で共感・共有できるものでなかったら、僕は訳せないと思うのです。そこに翻訳の真実があるのではないかな。

だから、どちらかと言うよりも、そういう共感・共有できる意識があつて、そこに到達しようとする日本語からのアプローチがあつて、そこででき上がった境目が強い力を持ち得るのだと思います。

櫻庭 最初の経歴紹介の時には思ったのですが、そこまで到達するには双方の言語にかなり熟達していないと、そう

いうことはできませんよね。中国語をかなり流暢にかつ深く理解できる、その中国語を獲得されたというのはいつ頃なのでしょう。

関根先生が最初に中国語に出会ったのが十三歳というところで、半年ぐらいで会話もほぼ不自由なくなつたというのですが、やはり中学校の時の体験というのは、かなり深いものなのでしょう。十三歳くらいは確かによく言葉を吸収しますけれども、ちょうど抽象思考ができてくる段階なので、それなりに母語の障害というのは大きく、そうすんなりとは入ってこないと思うのですが。ですので、読むという作業がかなりあつたのではないかと思います、いかがでしょうか。

関根 僕も中学時代の体験は大きいと思いますけれどもね。その後の西安時代も結構長いのですけれども、大連時代、西安時代を合わせて五年以上ですかね、僕が中国にいたのは。ただ、中学時代での抽象的な思考というのは、少し難しいかもしれません。大学の時に原文でかなり読んでいたので、そういう抽象的思考が培われたのは、やはり大学のときだったと思いますね。

慶應の中文というのはすごく学生を大事にするので、僕

が魯迅をやっていると云ったら、魯迅をやる先生を連れてくるということも平気でやってくれました。檜山先生はその時に慶應にいらつしやつたのです。それから、佐藤一郎先生と清末の文章なんかも随分読んできましたので、そういうところで培つたものというのは大きいと思いますね。

長堀 本質的な指摘が続いています。近現代の研究と同時代の翻訳がどういうふうにつながるのかというのは、かなり本質的な問題だろうと思います。

僕は関根先生の格非の翻訳について書評で書いたのだけれども、格非はあの当時としては世界性を持っていた数少ない、非常に良い作家ではなかったかなという気がします。そういう意味で、今読んでも、あるいはどこで読んでも読める作家の一人ではないかという気はします。

温州への現地調査と中国トロッキー派

長堀 さて、話題はまた変わりますが、これは関根先生の学問の世界のこととしては、ちょっと端っこにあるかなとも思うのですが、僕らは二〇〇七年に温州へ、渋谷蒼一郎さんと三人でキリスト教の調査というところで行きました。

その前に、その契機となることが一つあって、関根先生が胡風をやっている関係で、イギリスに留学する機会に王凡西に会いたいということでした。僕はその前年に王凡西を訪ねていたので、関根先生をご紹介しようということでした。連絡をとったわけです。王凡西も胡風のことならぜひ会うということだったので、残念ながら関根先生の行かれる数日前に亡くなってしまった。それで会いはかなわなかったのですが、そのかわりにお葬式に日本代表として関根先生に参列していただきました。その経緯は『トロツキ―研究』第四十号にレポートを書いていらっしやいます。温州に行ったのは、キリスト教の一つの大きな根拠地であったということ、それと同時にかつての中国トロツキ派の拠点でもあり、たまたま私がそこで何人か老トロツキストを知っていたので、彼らに案内人になってもらったわけです。それで、キリスト教会を、これは実は地上も地下も曖昧なところも含めてですが紹介してもらって回ったという経緯があります。これは本誌『中国研究』第二号に関根先生が報告を書いておられます。

王凡西のこと、また温州のキリスト教の調査の話、その辺を簡単にお話いただけますか。

関根 これは結構長い話で、長堀さんとの共同作業は非常に思い出深いものでした。しかも一緒に行ったのが体調を壊されて慶應を退職された渋谷誉一郎さんということ。三人で珍道中をやったのは面白い思い出です。

そのきっかけになる王凡西ですが、中国トロツキストの指導者、初期中国革命運動の重要な指導者だった人です。この王凡西さんは、実は北京大学にいた時に、僕がやっていた胡風や、それから後に竹内さんが翻訳した王実味という非常に個性的な二人と同級でよく知っていたわけです。それは長堀さんが調べて発表されていたことだったのだけれども、僕はぜひ王凡西に会って、一体この当時の人間関係はどうだったのかということをいろいろ聞ききたかった。いっぱい聞きたいことがあって、長堀さんをお願いして王凡西に会うという手配をしたのです。ずっとやりとりをして、会えるということまでなっていたのですが、忘れもしない、二〇〇二年十二月三十日に亡くなった。その直前まで王凡西と電話でも話ができていて、これで一月に会えればいいな思っていたのですが。本当にこの世界を志す若い人たちに言っておきたいけれども、会わなくちゃいけないと思ったら、すぐに会う。

長堀 そうですね。

関根 これは間髪入れず、なりふり構わず会うべきであったというをつくづく思いました。本当に数日差で駄目だったわけです。それで、僕はリーズで行われた葬儀にも参加して、ちょっと文章も書かせてもらったのです。半世紀近くも海外に追放されて、海外で最期を迎え、中国に帰ることがかなわない。僕は彼のお宅を整理するという場面に立ち会ったので、彼がどんな思いでいたのか、いろいろなものを考えさせられました。そういうことで、中国トロツキスト運動というのはとんでもない問題を含んでいて、それが今まで余りにも何も語られていないということが、僕の中でもはつきりしてきた。だから長堀さんがやっている研究は、そういう意味ですごく大切なのだと。

そうしているうちに、温州でのキリスト教会を調べることになりました。

長堀 二〇〇六年には、キリスト教の洗礼も受けられています。

関根 そうです。

それで、温州調査の時にどうしたらいいかと長堀さんに相談したら、温州というのは実はキリスト教会だけではなく

く、トロツキストの運動についても非常に大事なところだということだったのです。もしかしたらとは思ったのですけれども、トロツキストの老人たちはキリスト教会についても非常にいろいろやつてくれて、とても面白い取材ができました。中国のキリスト教会、地下教会も含めて、それがコミュニティを構成する上でもものすごく決定的な力に成長しているということを肌で感じた場面でした。

このことがやがて二〇〇八年の四川大地震の一年後に、まだまだ全然瓦礫の山も片付いてない被災地を回るところにつながります。その時は吉川君の案内で回ったのだけれども、一つのポイントになったのが教会の活動でした。その教会での取材を通して、キリスト教会がどんなに四川大地震の中で役割を果たしているのかということ、随分発表・報告させてもらいました。驚くことに、四川大地震の被災地に、温州の教会からたくさんの支援者が行っていることを知りました。

さらに、そこでの話をもとにして、これが重慶の取材につながる。重慶でのキリスト教会の取材をしていた時に、実は阿壠とか蒋介石がいた軍令部というのは、僕が取材に行った教会の真ん前だったということが分かるのです。そ

このところで重慶のキリスト教会も、一九三〇年代から大きな力を果たしていた。もともとはプロテスタントが大砲に乗ってやってきたと言われているけれども、その布教の歴史というのは、帝国主義的な侵略だけではなくて、本当に庶民の中に入って人々の文化、生活、医療を支えていくような大きなコミュニティの力もあったのだということを確信しました。

教育と学内行政

長堀 有難うございました。そろそろもう時間が少なくなっていますが、今度は関根先生の教育者としての面をお話しいただこうと思います。

最初に大学で教職につかれるのは北陸大学ですね。そこで三年おられて、一九九五年に慶應の文学部に移ってこられたということで、定年までで二十二年慶應義塾で過ごされることになるわけです。

まず、慶應中文での二十二年はどんな成果があったというふうに自負されているのか、やり残した課題はどのようなかということをお聞きしたいと思っています。

次に、学部長を五年半もやったという「行政職」の経験も振り返りながら、改革すべきところ、あるいはこれは残したいという部分、それらを簡単にお話しいただきたいと思います。

教育者の関根先生というからには、その教え子である吉川さんがいらっしゃるので、恩師関根先生はどんな先生なのか、まずはお話ください。吉川さんは『蟻族』と一緒に翻訳されているし、『紅日風暴』の字幕も一緒にやられているわけけれども、『蟻族』の訳稿は真っ赤になったのかどうか（笑）、その辺を含めて簡単に話してください。

吉川 僕が学部二年の時に関根先生が中文に來られたと思うのですけれども、三年生の時に近代文学史の授業をとった時に、僕の想像していた大学の先生らしくないというか、高校の先生とか普通のおじさんみたいな感じで、とても親しみやすい雰囲気だったのがすごく印象に残っています。僕が大学院に入ってから二年目にオックスフォードに行かれましたので、実は余り大学院でも授業を受けてはいないのです。

ほかに印象に残っていることと言えば、自分の好きな研究を自由にやらせていただいたことです。自分で自信を持

ってやっていきなさいという雰囲気でした。

訳稿は、そんなに真つ赤にはならなかったのですけれども（笑）、『蟻族』にしても『紅日風暴』にしても、いろいろな制約もあって、本当に結果を出せるのだろうかと思っていて、「やるぞ」と言っていると進めていく、その行動力はすごく印象に残っています。

関根 僕が慶應に來たのは、僕も全く予想外だったので、まずそこから話します。中国に渡ったというところまでは話しましたが、その時に天安門事件が起こるわけですね。天安門事件で中国が大変な混乱になっていった時に、大変有り難いことに、中文の先生方からは関根は一体どうしているのかということで、気にかけていただきました。村松先生はじめ、岡晴夫先生からも何度も連絡をいただきました。それで、一九九〇年になった時に、「中国ではもうやっていけないのではないか。今ならば慶應で講座を用意できるから戻っておいで」という、非常に有り難いお言葉があつて、戻つて非常勤の生活を始めたわけですが、数年後に機会があつて北陸大学に移るのですけれども、いろいろ状況的に難しいところがあつて困つてはいたのですが、僕は金沢で家も買いましたので、ずっと向こうにい

るものだと思つていたのです。ところが、慶應中文の辻先生が急逝されて欠員ができたのです。その翌年に慶應中文からの強い要請があつて、こちらに戻つてくることになったのです。それが一九九五年です。

その後、村松先生がいろいろなことを計画されていて、先ほどから問題になっている格非のコンテンツポラリィノベルスは、村松先生のお骨折りで新潮社からシリーズで出したものの一冊なのです。僕ら自身がまだ発展途上だということとその時にすごく強く思いましたけれども、とにかく村松先生からは、様々な機会を使つてどんどん広げなさい、若手の君の後輩たちに活躍の場をつくらなければいけない、チャンスがあつたらどんどん引き受けて、やるべきであるということを事あるたびに言われてきました。そういうこともあつて、いろいろなことに取り組んできたつもりです。ですから、現代文学の分野で言えば、前と比べればはるかにいろんな発表の機会はできたし、いろんな雑誌等もふえてきたように思います。そういう点では、少し成果があるのかなと思つています。

長堀 行政職時代も含めていかがでしょうか。

関根 二〇〇二年から〇四年にオックスフォードに行つて

いたのですが、帰ってきてからすぐに文学部執行部の仕事に近いものをやらなくてはいけなくて、ほとんど毎年様々な形で忙しいことになってしまったのです。特に途中から日吉主任になったのですが、二年目にその当時の学部長だった哲学の中川純男先生が白血病で亡くなるのです。

中川先生は最後まで学部のことを心配されて、いろいろな手配を病床からもされていたのですけれども、どうしてももう限界が来て、二〇一〇年の一月ぐらいだったかな、

「関根さん、悪いけれども代わりをやってくれ」ということで、代行することになりました。先生は戻るつもりでいらつしやいましたし、僕らもそう望んでいました。代行は一カ月ごとに僕がやりました。どういふことかという、ずっと代行というのはおかしいので、先生が戻ってくるまでというところで、一カ月単位で、学部会議のたびに代行の期間を延ばしながらやっていったのです。文学部では僕の前に一回だけ短期間の代行があったらしいですけれども、文学部史上、代行でこんなに長くやったのは、僕が初めてです。その後、非常に残念ながら中川先生が亡くなられて、その後の選挙で僕が選ばれ、自分では次の学部長選出までの「つなぎ」という意味でお引き受けすることにしたので

す。そういうつもりだったのですけれども、結局五年以上も務めることになりました。

中川学部長の頃には既に日本全体で文学部に対する風当たりが強くなってきたいて、端的に言うとな文学部は要らないのではないかという風潮が強くなりました。その中で、慶應義塾というのはそういうところは絶対に曲げない、非常に自由な気風を持っているところなのだと思うのですけれども、塾からの文学部に対する強い支援を感じました。

そういう慶應全体の支えの中で文学部を盛り立てていくというか、文学部が文学部らしく発展できるように自分は何ができるかというところでやってきたつもりです。

様々な機会に文学部をアピールするということも随分やってきました。僕はもともとお祭りが好きなので、お祭り人間みたいなことも随分やってきて、周りの人にはえらい迷惑をかけてきたような気もしますが、その最たるものが二〇一五年にやった文学部創設一二五年ということなので、すけれども、この時期に文学部の立場をもう一回見直して、しっかりとつないでいこうということで、文学部が自由に使える資金というのも募金で集めたわけです。

そういうこともあって、一二五年の記念事業に取り組ん

で、文学部一二五年の記念誌も出しました。文学部は十七専攻もあるのですが、文学部のいろいろな行事を通して、協力の体制ができたり、みんなで力を合わせて何かを仕上げていくという充実感が感じられたりということがあったと思います。以前に比して明朗さとか自信とかが文学部に感じられるようになり、組織が強くなったかなという感じはしています。

なぜ中国文学か？

櫻庭 二〇〇八年に『アジア遊学』に書かれた「革命の空虚と統一された自由——中国現代文学研究者の課題について」には非常に感銘を受けました。その中で、現代は「グローバル化した資本主義経済による人間の欲望の単一化が、どの国の出来事も千篇一律にして、そこに暮らす人間の人生を隅々まで支配している（……）こういう中で私たち研究者が立ち向かうには、価値観や欲求が『多様化』しているという幻想を打破することから着手すべきだ。現象として多様に見える現代社会は、世界規模の資本の価値観によって実は規定されている。個人の存在は、市場を構成する

欲望の器官となっている。」と指摘され、そして「文学研究はこういった真実に迫らなくてはならない。その中であって大切なのは、研究者が「何のために文学を学び、何のために中国に眼差しを向けているのか」ということを、一人一人の研究者の体温が感じられるような文学研究をしなればいけない。何よりも、研究者である自己と研究対象との関係を明確に認識すること」というようなことをおっしゃっています。確かにそうだと思いますが、同時に研究には客観化も大切ですね。冷静に客観化すると同時に情熱を持って対象に向かう、文学研究というものは対象との距離の間を揺れ動くものなのだと思うのですけれども、現在のような状況のなかで、すごくナイーブな質問で失礼かもしれませんが、なぜ中国文学をやるのかということを最後にお聞きしたいと思いました。

関根 端的に言うと、中国文学というのは自分の問題だと思っただけなんです。だから、先ほど距離感ということを指摘していただきましたけれども、対象との距離感というのは、つまり自分にとってそれが何であるかということを確認に意識することだと思っただけなんです。それは人によって全然違うわけけれども、僕にとって中国文学というのは、よ

その国の何かちょっと変わった人たちの文学ではなくて、それはアジアの問題であり、アジアに課された課題の一つの表れだと思うのです。そういう立場から、現代を切り開く一つの切り口に僕は参加しているという立場でやっているといます。

その話で一言つけ加えさせてもらいます。今日の出席者の皆さんは重要な中心メンバーなのですけれども、今年から慶應義塾の中国文学会というのがスタートすることになりました。最後の仕事のひとつかなと思っているのですが、昨年、早慶中国学会五十回で、早慶中国学会は任務を果たしたということで終了をして、慶應では新しい中国文学・中国学の研究組織をつくっていくということになりました。これは今まで、歴史上一度もない組織で、現在鋭意準備中なのですから、資金面でもどうやら支援がいただけるようになります。無事スタートできるだろうと思っています。こういうところでどんな若い人たちが研究発表を積極的にやって、それぞれの立場からのアプローチをしてもらいたいと思うし、また慶應義塾という非常に自由な気風の大学で行われている対等な立場での研究者の交流ができる大事な場として、これから発展させていってほしい

と思うのです。

慶應義塾の気風の一番大事なところを文学部は担ってきたと思うので、それを各学部にいる皆さんと共有しながら文学会が発展できればいいと思います。最後に、その文学会をぜひよろしくという言葉で終わらせていただきたいと思っています。

長堀 どうも有難うございました。まだ関根先生にお別れを言うのは早いのですが、退休後も、中国文学会を含めて、ぜひ引き続き活躍していただきたいと思っています。

今日は長時間に渡り、関根先生、それから櫻庭さん、吉川さん、どうも有難うございました。まだまだ言い尽くせぬことばかりですが、本日のところは、ひとまずお開きとしたいと思います。

(丁)

平成二十八年七月十六日(土)

慶應義塾大学日吉キャンパス

来往舎 二階二〇四室